

沼田稻次郎先生の略歴および主要著作

[学窓から戦地へ]



京都帝国大学入学時

1914 年（大正 3 年） 5 月 25 日 富山県高岡市にて父勇三郎（弁護士）、母すいの二男として生まれる

1921 年（大正 10 年） 4 月 高岡市立定塚小学校入学

1927 年（昭和 2 年） 4 月 富山県立高岡中学校入学

1931 年（昭和 6 年） 3 月 高岡中学校第 4 学年終了
4 月 第四高等学校（文科甲類）入学

1934 年（昭和 9 年） 3 月 第四高等学校（文科甲類）卒業
4 月 京都帝国大学法学部入学

1936 年（昭和 11 年） 処女論文「法解釈の真理性について」（ペンネーム・田井俊一）を発表（『学生評論』1 巻 1-2 号。のち長谷川正安・藤田 勇編『文献研究マルクス主義法学〔戦前〕』日本評論社、1972 年 12 月に収録）

1938 年（昭和 13 年） 3 月 京都帝国大学法学部卒業
4 月 同 大学院入学（特選給費生）、社会法・民法を専攻（石田文次郎博士に師事）

1939 年（昭和 14 年） 1 月 陸軍富山第 35 聯隊補充隊入営

1940 年（昭和 15 年） 7 月 北支派遣・独立混成部第 1 旅団第 72 大隊に転属、陸軍少尉

1942 年（昭和 17 年） 8 月 第 1 旅団司令部参謀部に勤務

1945 年（昭和 20 年） 7 月 金沢東部第 48 部隊に転属、陸軍大尉

[夕刊京都新聞社論説委員・組合長そして唯物史観労働法の構築]



夕刊京都新聞社（1947 年）

1945 年（昭和 20 年） 11 月 復員除隊
12 月 石田文次郎博士の長女・文子と結婚

1946 年（昭和 21 年） 1 月 上洛し、京都桃山に寓す
5 月 夕刊京都新聞社入社（政経部論説委員、組合長）
11 月 『生産管理論』（民科編学生叢書、日本科学社）出版

1947 年（昭和 22 年） 2 月 長女・由紀子生まれる

1948 年（昭和 23 年） 12 月 安倍能成・大内兵衛らの「平和問題懇話会」に参加のため上京（のちに「平和問題懇談会」へ発展しメンバーとなる）
12 月 次女・珠實生まれる

- | | | |
|-----------------|------|---|
| | 4 月 | 『日本労働法論（上）』（民科編学生叢書、日本科学社）出版 |
| | 12 月 | 『日本労働法論（中）』（民科編学生叢書、日本科学社）出版 |
| 1949 年（昭和 24 年） | 5 月 | 東京への特派により高円寺に移住（法政大学法学部にて労働法の集中講義～1951 年） |
| 1950 年（昭和 25 年） | 7 月 | 夕刊京都新聞社退社（立命館大学に移ることが決定していたときレッド
ページに より立命館大学へ移るのを辞退。立命館大学法学部にて法哲学の集中講義） |
| | 8 月 | 「日本労働法学会」創立に参加（理事） |
| | 11 月 | 『労働法論序説』（勁草書房）出版 |



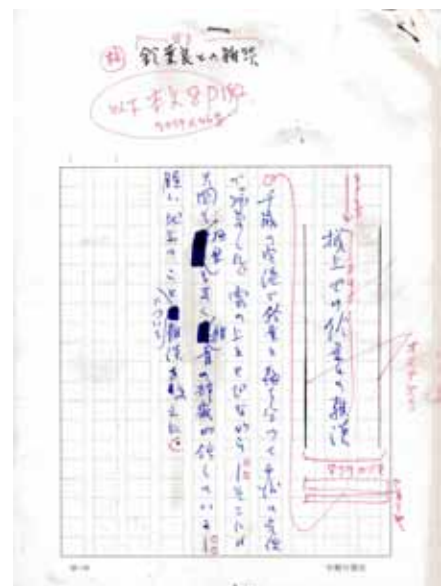
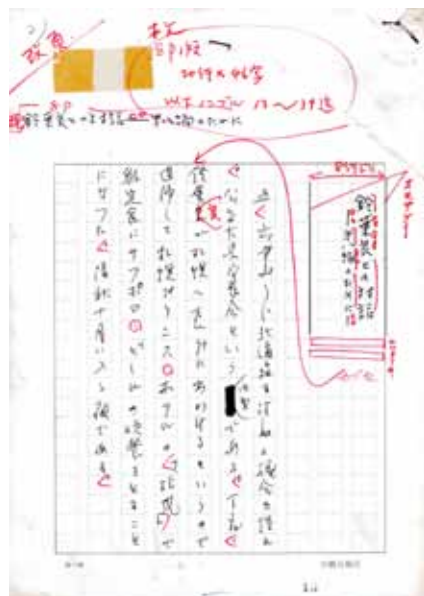
[再び学窓へ、そして団結権擁護法理の構築]



早稲田大学大学院労働法講義中
(1956 年秋)

- 1951 年（昭和 26 年） 4 月 東京学芸大学教授に就任
- 4 月 『法と政治の背離』（法律文化社）出版
- 9 月 『法と国家の死滅』（法律文化社）出版
- 1952 年（昭和 27 年） 3 月 法学博士の学位取得（末川博先生のすすめで『労働法論序説』と学位請求論文〈副論文「法と政治の背離」〉を立命館大学に提出）
- 4 月 早稲田大学にて労働法講義（～ 1980 年）
- 7 月 『団結権擁護論・上——権利感情と労働基本権』（勁草書房）出版
- 8 月 『団結権擁護論・下——労働者権の濫用と法の濫用』（勁草書房）出版
- 8 月 東京都立大学教授（人文学部）に就任
- *この年「労働法懇談会」にかかわる

- 1953 年（昭和 28 年） 1 月 『労働法学綱要』（如水書房）出版
- 7 月 『市民法と社会法』（法学理論篇 116、日本評論新社）出版
- 1954 年（昭和 29 年） 6 月 『団結権擁護論〔増補合本〕』（勁草書房）出版
- 7 月 『悪法と労働基本権』（法律文化社）出版
- 1955 年（昭和 30 年） 4 月 東京都立大学評議員に選出される（～ 1961 年まで連続）
- 10 月 『団結の研究』（勁草書房）出版
- 1959 年（昭和 34 年） 3 月 『学習労働問題』（日本評論新社）出版
- 1960 年（昭和 35 年） 5 月 『労働法論・上』（法律文化社）出版
- 1961 年（昭和 36 年） 5 月 『労働法——講義要綱』（法律文化社）出版
- 1962 年（昭和 37 年） 5 月 『運動のなかの労働法』（労働旬報社）出版



『運動のなかの労働法』（自筆原稿）

[ドイツ留学・都立大学初代法学部長・労働法学会代表理事そして「人間の尊厳論」の提唱]



梶原九段に四目で、本郷二木旅館にて
(1969年)

- 1962年(昭和37年) 6月 西ドイツ・ケルン大学に留学
(～1963年6月)
- 1964年(昭和39年) 7月 南原繁・海野普吉・桑原武夫・木下順二・広津和郎・松本清張・佐伯千仞・塩田庄兵衛・団藤重光・開高健・沼田稲次郎の11人で「下山事件研究会」を結成。
その活動の成果を『資料・下山事件』(みすず書房、1969年)として刊行。
- 8月 北京シンポジウムに1ヵ月参加
- 3月 『団結権の生命』(労働旬報社)出版
- 9月 『労働組合活動と法律』(労働経済社)出版
- 11月 『就業規則論』(東洋経済新報社)出版
- 1965年(昭和40年) 4月 東京都立大学法経学部長に就任
- 8月 『労働争議法の特種問題』(総合労働研究所)出版
- 1966年(昭和41年) 4月 法経学部分割にともない初代法学部長に就任(～69年3月)

3月 『現代の権利闘争』(労働旬報社)出版

1967年(昭和42年) 6月 『労働法要説』(法律文化社)出版

1968年(昭和43年) 7月 『権利闘争講話』(労働旬報社)出版

1969年(昭和44年) 7月 日本労働法学会代表理事に選出される(～73年7月)

2月 『労働基本権論』(勁草書房)出版

1970年(昭和45年) 7月 『労働協約の締結と運用』(労働法実務大系7、総合労働研究所)出版

1971年(昭和46年) 3月 『増補・法と国家の死滅』(法律文化社)出版

1972年(昭和47年) 4月 日本学術会議会員に選任される

4月 『団結権思想の研究』(勁草書房)出版

11月 『労働運動の権利』(現代の人権双書、法律文化社)出版

＊この年、人間の尊厳の理念ともからんで総評・社保協が社会保障学校を開いたのを契機に「社会保障研究会」の発足にかかわる



〔都立大学総長としての活躍と国際人権思想の鼓吹・労働法理論の総括・再構築の試み〕



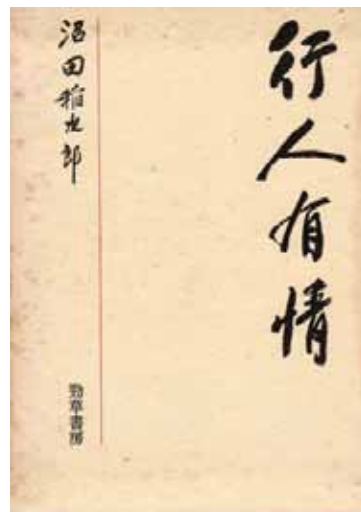
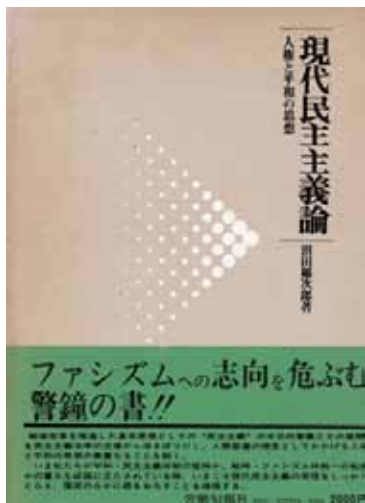
還暦（1974年5月25日）



還暦祝賀会

- | | | |
|--------------|-----|------------------------------------|
| 1973年（昭和48年） | 4月 | 東京都立大学総長に就任（～81年3月、2期8年） |
| | 5月 | 公立大学協会会長に就任 |
| 1974年（昭和49年） | 2月 | 『労働基本権裁判批判』（日本評論社）出版 |
| | 5月 | 『人権と団結』（労働旬報社）出版 |
| 1975年（昭和50年） | 8月 | 『社会法理論の総括』（勁草書房）出版 |
| 1976年（昭和51年） | 3月 | 『沼田稲次郎著作集・全10巻』（労働旬報社）出版（～12月） |
| 1977年（昭和52年） | 4月 | 『労働者の権利とはなにか』（労働旬報社）出版 |
| | 11月 | 『貴重なる憲法』（法律文化社）出版 |
| 1978年（昭和53年） | 10月 | 『現代民主主義論』（労働旬報社）出版 |
| 1979年（昭和54年） | 10月 | 『行人有情』（勁草書房）出版 |
| 1980年（昭和55年） | 4月 | 『社会的人権の思想』（新NHK市民大学叢書1、日本放送出版協会）出版 |
| | 12月 | 『労働法入門』（青林書房新社）出版 |
| 1981年（昭和56年） | 3月 | 東京都立大学退官 |
| | 9月 | 『私の大学観』（勁草書房）出版 |





〔国法協会長としての活動〕



国法協メンバーと（自宅にて、1988年）

1982年（昭和57年）7月 「日本国際法律家協会」
会長に就任（～89年）

4月 『民主主義法学と学者
像』（法律文化社）出版

5月 『野に民力の砦を』
（労働旬報社）出版

*この年、「国民の立場
で国鉄問題を考える七人
委員会」に参加

1984年（昭和59年）9月 第3回日ソ法学者シンポ
ジウム（モスクワとキ
エフ）および国際民主
法律家協会（IADL）第

12回世界大会（アテネ）に日本代表団長として参加
（～10月）

1985年（昭和60年）1月 砂原茂一・若月俊一らと「国民医療研究所」を設
立、その代表となる（現・公益 財団法人 日本
医 療総合研究所）

1986年（昭和61年）4月 「非核の政府を求める会」の創立に参画、常任世
話人として活躍

1987年（昭和62年）12月 『社会主義とヒューマニズム』（労働旬報社）出版





蓼科聴松閣



ギリシャスニオン岬（1984年）



聴松閣の襖



誕生日頃、白バラ花盛り（自宅にて、1987年）

[文子夫人の献身的介護による闘病生活]

- 1988 年（昭和 63 年）12 月 15 日 藤田勇・渡辺治両教授との座談会「いま改めて人間の尊厳を」（『労働法律旬報』89 年 1 月上・下旬号所収）終了直後に脳梗塞発症、河北病院へ入院。翌 16 日 虎ノ門病院へ転院
- 1989 年（昭和 64 年） 3 月 虎ノ門病院分院へ転院
6 月 虎ノ門病院分院を退院、伊豆韮山温泉病院でリハビリ
- 1991 年（平成 3 年） 4 月 伊豆韮山温泉病院を退院、以後、自宅療養



喜寿祝、新学舎の都立大学にて（1991年）



80 歳（傘寿）祝（1994 年）

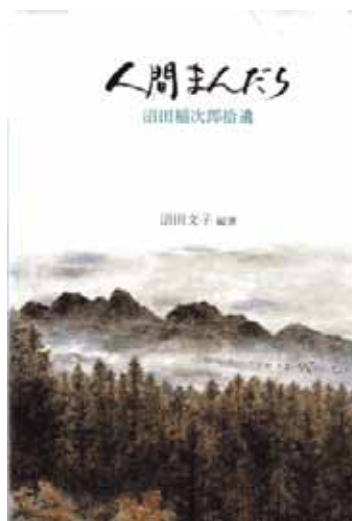


最後の笑顔、『労働法律旬報』新年号の座談会にて（1988年12月15日）

1997年（平成9年） 急性心筋梗塞により死去。享年82歳

▽以上、『人間まんだら』（1999年5月）より引用しました。

1999年（平成11年）5月16日 三回忌に沼田文子編著『人間まんだら——沼田稲次郎拾遺』（非売品）を刊行（労働旬報社）



〔『労働法律旬報』NO1413号掲載の初井常喜「沼田稲次郎先生の足跡」p 8-9に沼田先生自筆の「著作目録」により加筆したもの〕

越中人譚

発行：チューリップテレビ 文：仁ヶ竹亮介（高岡市立博物館学芸員）、2003年7月10日

越中人譚

磯部四郎

竹田省

沼田稲次郎

【法律】

労働法学界を先導した法学者 沼田稲次郎

日本の労働法学の礎を築いて自ら実践

理論と実践——。この対置される語句をそれぞれ象徴する人格は、時としてまったくの矛盾を生む。しかし、また時としてそれが破綻なく統一され、しかも自己の器に収めうる人格というのめわずかだが存在する。

労働法学界をリードした沼田稲次郎は、戦後の労働法学を「沼田労働法学」として理論化・体系化して礎を築き、またその一方で、労働運動や平和運動の渦中に積極的に自らを投げつけた人物である。

沼田稲次郎は大正三年（一九一四）五月二十五日、高岡市新横町（後に桜馬場に移転）に父沼田勇三郎、母すいの次男として生まれた。父勇三郎は津沢町新西（現小矢部市）から高岡に出て、弁護士として約半世紀にわたって活躍し、富山県弁護士会会長も務めた人物である。稲次郎は高岡市立定塚町尋常小学校を経て、県立高岡中学校（現高岡高等学校）に入学した。中学校の数学教師松野尾照景が解雇されたとき、稲次郎は解雇反対・校長排斥のストライキのリーダーになったという。

昭和六年（一九三二）、稲次郎は第四高等学校（現金沢大学）文科甲類に入学した。当時の学生の多くがそうであったように、稲次郎もまた、マルキシズムと夜の街にその青春の気焔を上げていた。

昭和九年（一九三四）、稲次郎は京都帝国大学法学部法律学科（以下「京大」と略称）に入学。時あたかも滝川事件（京大法学部教授滝川幸辰の著書が共産主義的であるとして、文部大臣鳩山一郎が強制罷免した事件）の翌年で、反対運動と弾圧の余燼が治まらぬなか、稲次郎も講義中にヒラを撒いたり、治安維持法違反容疑で逮捕（不起訴）されたり、無期停学処分を受けたりしつつも、「美酒に酔い、極道もてきた」（晩年の随筆集『行人有情』）という。

しかし、稲次郎はこの京大時代に加古祐二郎教授と出会い、弁証法的唯物論に根ざす唯物史観に目覚めていく。マルクス主

義的社会主義は、稲次郎の生涯にわたる思想の根底を成した。

※

満州事変、天皇機関説攻撃、二・二六事件、そして日中戦争へと突入する激動期に学生時代を過ごした稲次郎は、昭和十三年（一九三八）に京大大学院（特選給費生）に進み、石田文次郎博士のもとで社会法・民法を学ぶ。しかし、その翌年には富山の歩兵第三十五連隊補充隊に徴兵され、七年間の軍隊生活が始まった。入営前日までかかってドイツの労働協約法理についての論文を書いて石田博士へ送り、学問の世界と決別した。稲次郎二十六歳であった。

昭和十五年（一九四〇）から五年間、稲次郎は中国河北省鄆野・磁県に派遣され、終戦は療養中の陸軍病院（岐阜県下呂）で迎えた。初年兵のときから上官や規制に従順ではなく、豪傑と渾名された稲次郎だが、彼が教育した岐阜県や長野県の初年兵たちによって戦後、「沼田会」（後に稲次郎の雅号から「無縫会」と改称）



写真／沼田稲次郎 『現代法と労働法学の課題』より転載

が結成されているところから、部下との厚い交情のほどが察せられる。

昭和十八年（一九四三）に一時帰国した稲次郎は、石田博士のもとを訪れ、その娘・文子と出会う。復員後、三年間待たせた文子と結婚した（軍事郵便で送った交際は、遺稿集『人間まんだら』に詳しい）。戦争は稲次郎から多くの戦友や部下、兄弟夫婦（戦後、兄は原爆で逝去の生命を、さらに高岡の実家をも強制疎開により奪った。この怒りは稲次郎をして、生涯をかけて権力に抗し、労働者のために邁進する原動力となった）。

※

昭和二十一年（一九四六）、やむなく京都桃山に寓居した稲次郎は、夕刊京都新聞社に入社。論説委員として講演や執筆する多忙な日々の中、驚異的な精力で『生産管理論』を、同二十三年には『日本労働法論（上・中）』を出版した。後に、『戦後の言論の自由』に興奮し、何か書きまわつてみたい心境になった」と述べている。

しかし、そんな稲次郎はレッド・パージ（昭和二十五年、GHQの指導により政府・企業が行なった日本共産党員とその同調者に対する一方的な解雇）の煽りを受けることとなり、同年七月に新聞社を退社。だが、稲次郎は屈しなかった。それどころかわずか四月月後の



写真／金婚を迎えた沼田稲次郎と妻文子 【人間まんだら】より転載

十一月には『労働法論序説』を出版するのである。

これらの著書は、戦後日本の労働法学を初めて本格的に理論化・体系化したもので、その後の労働法学を基礎づけた名著といわれるが、それは稲次郎の不屈の精神が生み出したものである。もともとその陰には文子夫人の内助の功も大きい。新聞社の月給やわずかな失業保険はすべて書籍代などに消え、夫人はただの一度も現金を見せようとすることがなく、随分と着物を売りに走りまわったという。

※

戦後日本の労働運動は、再軍備化・破防法制定・労働法改悪など、いわゆる「逆コース」といわれる時代に燃え上がり、共産党に指導された産別会議が、次いでそれに対立した総評がその主流となるが、その総評も離合集散を繰り返した。

このような流れの中、昭和二十六年（一九五二）稲次郎は東京学芸大学教授に、翌二十七年には三十年間籍を置くことになる東京都立大学の教授に就任し、法学博士の学位を授けられる。その頃から以前にも増して精力的に論文・著作を発表する。『団結権擁護論（上・下）』（同二十七年）、『市民法と社会法』（同二十八年）、『憲法と労働基本権』（同二十九年）、『団結の研究』（同三十年）、『運動のなかの労働法』（同三十七年）などの著作では、自ら『序説』で示した労働法学を、歴史過程と真摯に向き合いながら、詳細に肉付けして精錬していくのである。

法学のみならず、法哲学や法解釈学などにまたがるその膨大な研究成果は、学界・実業界の注視するところとなり、いつしか『沼田労働法学』と呼ばれるようになる。後（昭和五十五年）に稲次郎は、「苦悩に満ちた組合運動の提起する具体的な問題をめぐって法理を考え、全体的意味関連を究明し、労働法学を深めてゆくのは、はりあいのある理論的作業であつた」と回顧している。

しかし、稲次郎は机上に空論を並べるだけの学者ではなかった。常に自ら理論と実践との統一を強調する立場をとり、奥越・海員・林野・国鉄・教師など全国各地の労働組合を訪れ、講座やストライキの場で盛んに発言して支援する社会的活動を積み重ねた。人民を取り締まる権力のための法律学から、民衆の権利を守るための法律学へと転換せしめるのは、労働者の闘志と力溢れる集団的エネルギーにはかならないことを、新聞社時代

に自ら組合長として活動していた稲次郎は、身をもって知っていたのである。

※

稲次郎は、早稲田大学や京都大学など多くの他大学へも出講した。その講義は厳しきながらも愛情溢れるもので、優れた教育者でもあった。日本学術会議会員（昭和四十七年・同五十年）を務めたほか、日本労働法学会、民主主義科学者協会・法律部会、日本法社会学会、日本民主主義法律家協会、国際民主法律家協会などの理事を務めた。そして昭和五十一年（一九七六）、膨大な著作を『沼田稲次郎著作集』（全十巻）にまとめ、同五十六年には総長を二期八年務め終えた東京都立大学を退官した。

稲次郎はまた、『遊び』の大切さも知っていた。幼い時より俳句・漢詩・碁に親しんでいた。学生・軍隊・大学時代を通して周囲に碁を広め、時には別荘の信州・碁科の山荘（聴松閣）に仲間を集めて「碁科本因坊」もやった。人の和を大切にした稲次郎は「手談」（碁の雅称）の効能を熟知していたのである。

晩年、稲次郎は「平和、教育、女性、医療の四つの問題をこれからの仕事にする。一言でまとめれば人間の尊厳の追求だ」と語り、「後期沼田労働法学」ともいえる「人間の尊厳」論を展開し、草の根運動という形で実践していく。すなわち、非核の政府を求める会、原水爆禁止日本協議会、日本AALLA（アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会）などへの参加や、国民医療研究所設立の提唱・設立などである。

しかし、昭和六十三年（一九八八）、稲次郎は脳梗塞で倒れ、言語を失う。八年間にわたる闘病生活で夫人の献身的な介護を受け、平成九年（一九九七）五月十六日逝去。享年八十二歳であった。

文・仁ヶ竹亮介（高岡市立博物館学芸員）

略歴【沼田稲次郎 めまた いねじろう】

■大正三年（一九一四）五月二十五日、高岡市新横町に父沼田勇三郎、母すいの次男として生まれる。

■昭和六年（一九三一）第四高等学校に入學。

■昭和九年（一九三四）京都帝國大学法学部法律学科入學。

■昭和十四年（一九三九）富山第三十五連隊補充隊に入營。

■昭和二十一年（一九四六）京都桃山に転居。夕刊京都新聞社に入社。「生産管理論」を刊行。

■昭和二十三年（一九四八）『日本労働法論』（上・中）刊行。

■昭和二十五年（一九五〇）退社。日本労働法学会理事。

■昭和二十六年（一九五一）東京学芸大学教授に就任。

■昭和二十七年（一九五二）法学博士の学位を授与される。

■『国権擁護論』（上・下）刊行。東京都立大学教授に就任。

■昭和二十八年（一九五三）『市民法と社会法』刊行。

■昭和三十一年（一九五六）『運動のなかの労働法』刊行。

■昭和三十三年（一九五八）『現代の権利闘争』刊行。東京都立大学法学部長に選任される（同四十四年）。

■昭和四十八年（一九七三）東京都立大学総長に選任される（同五十六年、二期連続）。

■昭和五十二年（一九七七）『沼田稲次郎著作集』刊行。

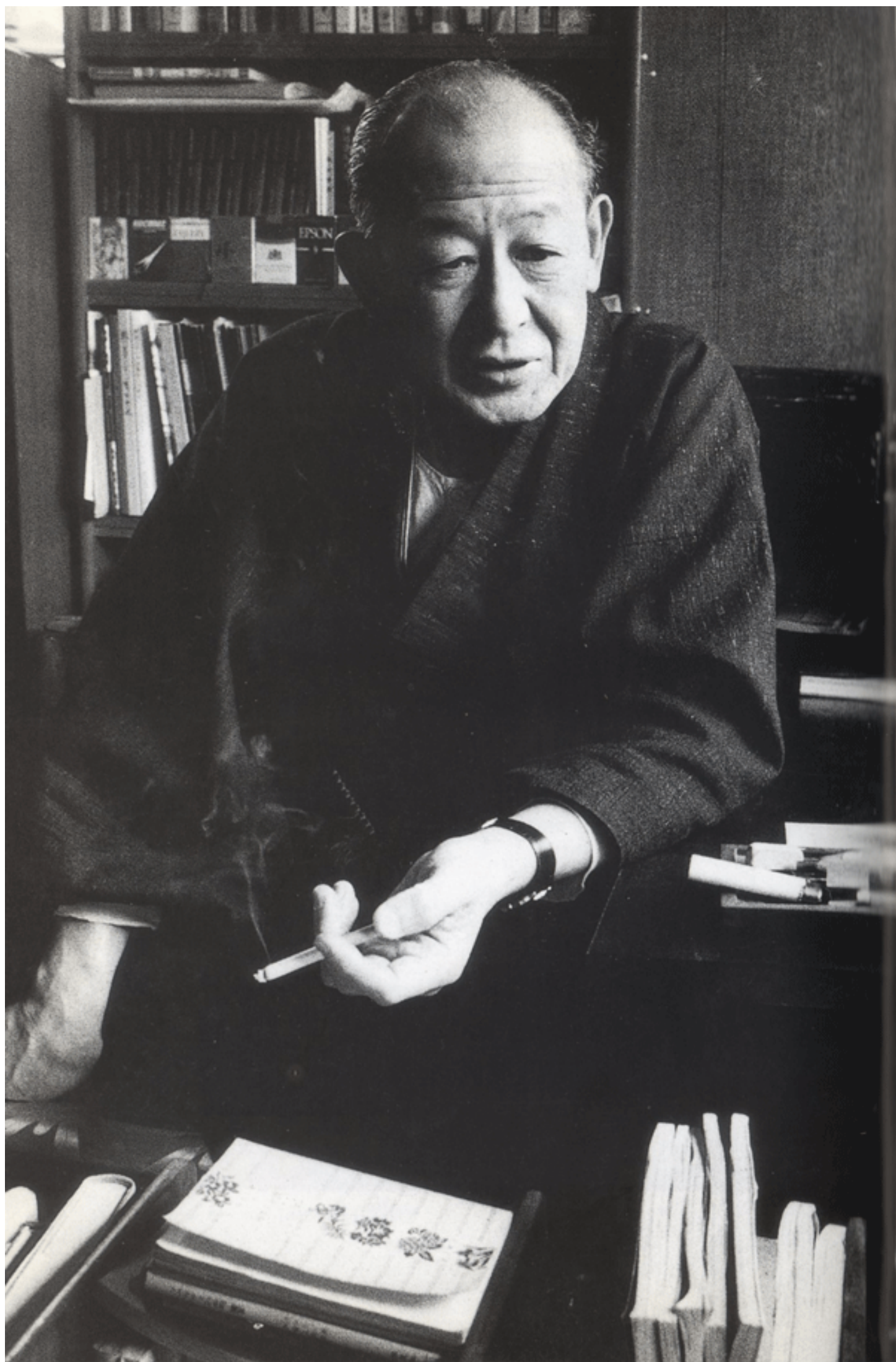
■昭和五十六年（一九八一）大学退官。同大学名誉教授。

■昭和五十七年（一九八二）日本国際法律家協会会長に就任。

■昭和六十年（一九八五）国民医療研究所を提唱、設立。

■平成九年（一九九七）五月十六日逝去。享年八十二歳。

法学のみならず、法哲学や法解釈学などにまたがるその膨大な研究成果は、学界・実業界の注視するところとなり、いつしか「沼田労働法学」と呼ばれるようになる。



第一号	【郷土】	大井冷光・翁久允・大田栄太郎
第二号	【国際】	林忠正・高峰謙吉・嵯峨寿安
第三号	【創校】	馬場はる・島嶺・並木文右衛門
第四号	【医学】	黒川良安・石川日出鶴丸・佐藤やい
第五号	【情報】	瀬木博尚・正力松太郎・角川源義
第六号	【電源】	金岡又左衛門・山田昌作・加藤金次郎
第七号	【発明】	高松梅治・川原田政太郎・元井豊蔵
第八号	【詩壇】	田中冬二・高島高・瀬口修造
第九号	【横綱】	梅ヶ谷藤太郎・太刀山峰右衛門・立浪彌右衛門
第十号	【教育】	南日恒太郎・山崎兵蔵・亜武果マーガレット
第十一号	【農地】	松村謙三・萩原正清・椎名道三
第十二号	【起業】	浅野総一郎・黒田善太郎・大谷米太郎
第十三号	【童心】	室崎琴月・多胡羊衛・井口文秀
第十四号	【漢谷】	冠松次郎・山田胖・宇治長次郎
第十五号	【岳人】	小杉復堂・田部重治・吉沢庄作
第十六号	【献身】	谷口節道・萩野昇・堀田くに
第十七号	【芸能】	富士月子・常磐津明石太夫・津村謙
第十八号	【法曹】	細野長良・金山季遠・石坂修一
第十九号	【有職】	林良二・高柳博・安部武雄
第二十号	【国宝】	石黒宗磨・松原定吉・松本謙三
第二十一号	【意匠】	畑正吉・国井喜太郎・大野為次
第二十二号	【史壇】	木倉豊信・林喜太郎・高瀬保
第二十三号	【工場】	河合良成・井村荒喜・吉田忠雄
第二十四号	【金融】	安田善次郎・中田清兵衛・米田元吉郎
第二十五号	【言論】	井上江花・横山源之助・海内果
第二十六号	【国文】	山田孝雄・志田義秀・高崎正秀
第二十七号	【砂防】	三ツ・デ・レー・赤木正雄・高田雪太郎
第二十八号	【進取】	佐伯宗義・金岡幸二・大矢四郎兵衛
第二十九号	【官僚】	南弘・牛塚虎太郎・大橋八郎
第三十号	【造形】	本保義太郎・中野双山・竹内源造
第三十一号	【自然】	石井運太郎・菊池勘左工門・植木忠夫
第三十二号	【音楽】	福井直秋・高階哲夫・黒坂富治
第三十三号	【文壇】	源氏鶏太・柏原兵三・堀田善衛

第三十四号	【知事】	高辻武邦・吉田実・中田幸吉
第三十五号	【万葉】	五十嵐篤好・高沢瑞信・田辺武松
第三十六号	【花樹】	加茂善治・水野豊造・進野久五郎
第三十七号	【開拓】	沼田喜三郎・川端元治・牧野キク
第三十八号	【歌壇】	篠井嘉一・渡辺順三・木保修
第三十九号	【民権】	稲垣示・島田孝之・米沢紋三郎
第四十号	【汽船】	馬場道久・藤井能三・南嶋間作
第四十一号	【私塾】	岡田興陽・小西有義・大橋十右衛門
第四十二号	【婦選】	平岡初枝・高木富代・池淵正
第四十三号	【学僧】	笠原研寿・金山穆昭・梅原眞隆
第四十四号	【達人】	齊藤弥九郎・石黒信由・江尻豊治
第四十五号	【婦權】	中川幸子・星かつゑ・富本一枝
第四十六号	【生業】	郷沢金広・中沖太七郎・榎井勤六
第四十七号	【映画】	河浦謙一・丸根賛太郎・佃血秋
第四十八号	【反骨】	金山從革・若宮卯之助・細川嘉六
第四十九号	【稲作】	今堀甚三・上坂傳次・金岡甚三
第五十号	【書庫】	加藤宗厚・村上清造・岩倉規夫
第五十一号	【俳壇】	前田普羅・金尾梅の門・茂井竹の門
第五十二号	【棟梁】	岩城庄之太・藤井助之丞・中村外二
第五十三号	【蒐集】	廣田不孤斎・堀井三友・長島勝正
第五十四号	【来遊】	川田順・吉井勇・井上靖
第五十五号	【官選】	国重正文・浜田恒之助・白上佐吉
第五十六号	【建築】	清水喜助・松井角平・吉田鉄郎
第五十七号	【技匠】	大島五雲・米治一・須賀松園
第五十八号	【文学】	岩城準太郎・田部隆次・尾島庄太郎
第五十九号	【書壇】	内山外川・青柳石城・上原欣堂
第六十号	【女流】	小寺菊子・沢田はぎ女・方等みゆき
第六十一号	【法律】	磯部四郎・竹田省・沼田稻次郎

越中人譚【法律】

発行日 平成十五年（二〇〇三）七月十日 第一版・第一刷
 発行人 中尾哲雄「株式会社チュールップテレビ」
 本社 社・高岡市広小路五番十三号
 電話（〇七六）二六・六〇〇〇
 放送センター・富山市奥田木町八番二十四号
 電話（〇七六）四四二・七〇〇〇

編集人 岡田徳右衛門順一「岡田編集写真事務所」
 富山市中市一丁目三十番五号
 電話（〇七六）四二三・八八三〇

写真 岡田徳右衛門順一

印刷 菅野印刷製本株式会社

- 富山県図書館協会・推薦
- 富山県郷土史会・推薦
- 富山県民生涯学習カレッジ・推薦
- 富山県小学校長会・推薦
- 富山県中学校長会・推薦
- 富山県高等学校長会・推薦
- 富山県PTA連合会・推薦
- 財団法人富山県教育記念館・推薦
- 財団法人サントリー文化財団・推薦

定価 五〇〇円（税込み）